『まんじ』79 号(2001.2)

神の手

新井　宏

数多くの伝記文学の中でも、トロイを発掘したシュリーマンの自伝や伝記ほど、波乱の生涯を、誰にでもわかり易く、物語性豊かに語り聞かせてくれるものはないであろう。まるで良く練り上げられた壮大なドラマである。そのため、戯曲やオペラあるいは青少年向けの偉人伝の定番にもなっており、現在でも世界中に感銘を与えつづけている。

幼い日、父から聞いたホメロスの叙事詩に魅せられ、いつの日にか焼け落ちたトロイの町を発掘することに心を決めたシュリーマンは、まずは十分な資金を得るため、極貧の中から、語学の才を武器に、商売の階段をかけ登り、数々の事業に成功して巨万の富を得る。そして四十代になって、考古学を学び、学界の常識を覆し、ついにはヒッサルリクの丘に「プリアモスの財宝」を発見し、トロイ戦争が史実であったことを証明する。まさにアマチュア学者の大勝利であった。

このようなシュリーマンの栄光に満ちた感動的な物語は、青少年の夢をかきたてずにはおかなかった。フロイトもそのひとりである。私も、アーヴィング・ストーン著（水上峰雄訳）の『シュリーマンの生涯』を読んで、考古学への夢を育んだ。

初恋の少女ミンナと語り合ったトロイ発掘の夢を、生涯かけて実現して行くシュリーマン。十三カ国もの言語を自由にあやつり、事業家として大成功した第一の人生、そして幼い日のロマンを追い求め、地中海考古学を開花させた第二の人生。物理的には不可能なふたつの人生を実現して生きたシュリーマンは、何もかもが理想的であり、私も彼の人生に密かに自分の夢を重ねていた。

ところが最近になって、この感動的な物語が、全て偽りだったことが、相次いで明らかにされた。エルヴェ・デュシエーヌ著（青柳正規監訳）の『シュリーマン・黄金発掘の夢』とデイヴィッド・トレイル著（周藤芳幸ほか訳）の『シュリーマン・黄金と偽りのトロイ』である。

シュリーマンに虚言癖があったことは、前からある程度知られていた。しかし、何から何まで偽りで彩られていたことを、誰が想像したであろうか。とにかく、凄まじいばかりの虚飾なのである。

まず幼い日のトロイに対する関心からして、全くの作り話であった。それは、トロイ発掘の前にシュリーマンが書き遺した膨大な手紙や日記の中に、トロイのことなど、どこを探しても書き遺されていないことから判る。また幼い日に読んだルートヴィッヒ・イェッラーの『世界歴史』、そこには、燃え盛るトロイの城壁を背に、父を背負い幼い息子の手を引いて逃げるアイネイアスの銅版画が載せられているが、これも厳密な考証結果では、彼がトロイの発掘後に入手したものであった。

もっとも、この程度のことであれば、功成り名遂げた人物の自伝という性格からして、シュリーマンを嘘つきと決めつけることはないであろう。問題なのは、彼の人生のあらゆる面で、この虚言癖が付きまとっていたことである。

そうなのである。実は、発掘の最大の成果である「プリアモスの宝」さえも、彼の手によって埋められ、そして掘出されたと疑われているのである。まさに「神の手」であった。

シュリーマンの虚言癖が病的で想像を絶するのは、私的な日記でさえも、嘘で満ちていることである。例えば、一八五一年二月二十一日のフィルモア大統領との一時間半にわたる歓談など、実況放送さながら臨場感にあふれるものであるが、まったくの創作であり、また同年のサンフランシスコ火事を生き生きと書き記した日記の部分も、検証の結果では、彼自身の経験ではありえない。

これは当然ながら商売面にも現われていた。一八五一年から一八五二年にかけて、黄金ラッシュに沸くサクラメントで百三十五万ドルもの砂金を仲買して大儲けしているが、その時には買い付けた砂金の送量をごまかして取引停止にあっている。また一八五九年にはサンクト・ペテルスブルグで詐欺犯として告発されたりしている。前妻との離婚のため、アメリカの市民権を取ったのも、詐欺的な申告によってであり、その後も、同時にふたりの女性に求婚して顰蹙を買っている。

この性向は、書き物となると、ますます巧みに発揮され、いたるところに盗作的な記述が残されている。例えばシュリーマンは、地中海地方への最初の旅行をもとにして、一八六九年に『イタカ』という考古学的なエッセ

イを出版している。この本の内容はなかなか好評だったようで、後にロストック大学で哲学博士の学位を取る際、主論文として提出されているが、その内容といえば、ヴーウェンの研究の焼き直しであり、『ギリシャ旅行者のためのハンドブック』に、大部分記載されていたものである。

この事はおそらく、シュリーマンの初めての著作『現代のシナと日本』にも当てはまるであろう。

実はシュリーマンが、一八六五年幕末の日本に来ていたというと誰もがびっくりする。シュリーマンの膨大な伝記を読んでも、彼が日本に来たことなど、束まわりでアメリカに渡った旅行の一環として、一行書かれているだけなので無理もない。しかし彼は中国と日本に滞在した二ヶ月の経験をもとに、文庫本にして二百ページにもなる旅行記を書き残し出版している。ただしその本が、石井和子により『シュリーマン旅行記清国・日本』として日本に紹介されたのは、ほんの十年ほど前のことであり、一般にはあまり知られていなかった。

この本を読むと、当時の横浜のみならず、生糸の集散地である八王子まで遠出したことや、著しく制約されていた江戸の市中見物さえ、比較的自由に行っている様子が、詳細に描かれている。たった一ヶ月の滞在で、良くもこれほど多彩な経験ができたものだと驚くばかりだが、あるいは他人の話を自分のことのように脚色して書いたものかも知れない。貴重な史料であるが、歴史研究者による検証が必要と思われるのは、彼の虚言癖がこの書のみ例外であったとは考えられないからである。

このように、私生活や日記あるいは著作に頻出する虚言癖が、考古学の世界に限って無縁であったなどと、楽観的に考えるわけには行かない。いや、そもそもシュリーマンの虚言癖が、百年以上もたった今日、ある意味で執拗に追求されているのは、むしろその問題が考古学上の大問題だからである。

例えば、シュリーマン発掘のクライマックスである「プリアモスの財宝」発見の経過について触れて見よう。この財宝は、長さ一メートル、幅五十センチの不思議な形をした銅製容器の中から見つかったもので、金、銀、銅器などが多数入っており、まさに財宝というに相応しいものであるが、公式発表によると、一八七三年五月にシュリーマンと彼の妻ソフィアが発見して取り出したことになっている。しかしこれは事実ではない。その時、ソフィアはアテネにいて現地を離れていたのである。

また発見場所が当初の「プリアモスの宮殿の一室」から後に「隣接する市壁」に変わった上に、図面では市壁の外側になっていて、その経過が不自然であり、発見日も最初の五月三十一日から六月七日に変わっている。更に決定的なことは、「プリアモスの財宝」として写真に収められた出土品のいくつかは、発掘の二年も前に撮影

された、別の出土品の写真のなかにも見られている。
　そのため、これらの財宝はシュリーマンが闇で購入して、こっそり遺蹟に埋めておいたものと糾弾されるようになっている。またシュリーマンが、その後ミケーネで発掘した何百点もの遺物も、実は贋作なのではないかと疑われ始めている。ギリシャでは現在、八百ヵ所以上のミケーネ時代の遺跡が知られているが、シュリーマンが見つけたミケーネの竪穴墓から出た金の十分の一の金でさえ出土した例が皆無なのである。問題は既に、シュリーマンの発掘に虚偽があったか否かではなく、その中にどれだけ本物があるのかに移っている。

　考古学が科学と最も異なるのは、その検証過程である。科学では、ある事実が提示されると、必ず追試が行われ、追試で同じ結果が得られてはじめて、その事実は認証される。しかし考古学では、いくら似たような場所を発掘しても、同じような結果が得られるとは限らない。むしろ同じような結果がでることの方が稀である。しかも考古学は遺物を求めての学問であり、百の推論よりもたった一つの決定的な事実で、勝敗が決まってしまうところがある。
　だから自分の掲げる学説を正しいと信じていれば、さほど罪の意識なく、発掘による事実関係を、都合良くカモフラージュして表現することなど日常的に起こり得るのである。その延長線に恣意的な捏造が起こる素地がある。
　逆にいえば、そのような考古学の性格から、新しい発見や学説に対して、極めて懐疑的になっているのも考古学界である。どんなに重要な事実が見つかっても、都合が悪ければ、黙殺して済ますことができる。二度と検証される可能性が少ないから、権威の顔色を見て、余計なことは言わないで居れば安泰である。新しく提出された斬新な学説も、よほど確定的な事実でも現われないかぎり、とりあえず無視してしまう生活の知恵も、その流れである。
　特に、新しい事実の発見者あるいは新しい学説の提唱者がアマチュアである場合、絶対といってよいほど黙殺される運命にある。黙殺されることは、はっきり根拠をあげて否定されるよりもはるかに厳しい拒絶である。
　在野の研究者相沢忠洋が、岩宿遺蹟で旧石器を発見した場合もそうであった。それまでは火山活動の盛んな日本列島にあって、火山灰の赤土層より古い時代に人が住んでいたはずがないというのが定説で、専門家達は三年間も相沢忠洋の主張を冷笑し無視していた。そんな中で、相沢忠洋は納豆の行商で生活を立てながら、旧石器の存在を訴えつづける。それに反応したのが、若き日の芹沢長介であった。
　当時、芹沢長介は明治大学の大学院生であったが、彼

の説得によって、明大助教授の杉原荘介らが動き、旧石器時代の存在を初めて学術的に証明することになる。しかし、その結果を受けても日本の学界は、相変わらず冷ややかに無視を続けた。しかもその一方では、驚くべきことに、杉原荘介は、新聞発表から学会報告、報告書の刊行まで自分だけの名前で行い、最大の功績者である相沢忠洋は、単なる「あっせんの労をとってくれた人物」としてしか扱ってもらえなかった。二重、三重にわたるアマチュア無視である。これに抗議して芹沢長介は大学を去る。

このような雰囲気にある考古学界では、専門家は何事にも懐疑的で大胆な主張を嫌い、アマチュアはその反動で、独創的な主張を無警戒に展開することになる。その結果、アマチュアは無数の間違いを犯す一方で、その拘りによって画期的な業績を独占することにもなる。日本の考古学界史を紐解けば、まさに在野学者の活躍のオンパレードである。

そもそも大森貝塚のモースは動物学者であったし、古墳研究の草分けガーランドも冶金学者であった。もちろんその頃、考古学という学問体系が日本になかったのであるから、当然といえば当然である。しかし、その後の考古学の研究も、その多くの部分を、情熱的な在野的研究者によって支えられてきた。前出の相沢忠洋はもとより、森本六爾、中山平次郎、相良信夫、藤森栄一、それに山根徳太郎、原田大六、坪井良平など個性豊かな方々が、どれほど日本の考古学界に貢献したか計り知れない。おそらくあらゆる学問分野の中で、考古学ほどアマチュア参加の多いものもないであろう。

このような在野研究者の活躍は、時によっては、職業としての専門学者からの妬みをさそい、意図的な無視や低評価や、業績の横取りを生むことにもなる。そうなると、むきになるのが人間の性であり、アマチュア研究者は、更に学説を先鋭化させ、強引な論理や主張、無理な証拠を求めて走り出す。そしてその無理が綻びを生み、専門学者からの反撃にあって、また無視や冷笑に晒される循環を生む。

シュリーマンの場合もそうであった。その当時、ホメロスの叙事詩『イリアス』などは、まったくの虚構であり、トロイを探そうとすることなど、専門家の間では、まったく馬鹿げたことだと思われていた。もちろん『イリアス』などに歴史の反映を認め、トロイを実在の場所と考える者もいたが、それは少数派であり、しかもその場所としては、より内陸のブナルバシを想定していた。

そんな中で、初めてトロイに旅行したシュリーマンは、ヒッサルリクこそがトロイであると信じるアメリカのダーダネルス副領事フランク・カルバートに出会う。既に部分的な発掘を進めており、かなりの手応えを得ていた。

シュリーマンはこれに飛びつく。

何らかの遺跡があることは、初めからはっきりしていた。ただし、シュリーマンにとっては、それが『イリアス』のトロイでなければならなかった。シュリーマンの事業家としてのセンスからいえば、多大な投資に見合う成果は、ヒッサルリクが焼け落ちたトロイであることを論証し、全世界を驚かせることによってしか得られなかった。最初から結論を決めての発掘であった。だから何としても「プリアモスの財宝」が、それに相応しい場所から発掘される必要があった。

シュリーマンにとっては、学問的な好奇心もさることながら、アマチュア学者が専門学者の鼻をあかして、ホメロスの世界を実証するという物語を完成させ、全世界からの称賛を浴びることがより重要であった。それには彼が正規の教育を受けなかったというコンプレックスも関係している。経済的な豊かさを得た現在、シュリーマンにとって、社会的な名声こそが必要であった。いくら十三カ国の言語を話せても、それは教養とは見なされなかった。

シュリーマンにとっての最初の名声は、著作活動によって得られた。日記にさえ虚構を書きつづけたシュリーマンは、生まれながらの小説家であった。他人の業績を縦横に組み合わせ、そこに彼の視点を与えると一冊の本が出来上がった。そのようにして書かれた『イタカ』によって哲学博士の称号を得たことは彼にとって絶大な支えであった。そしてこれをトロイの発掘によって拡大再生しようとしたのに違いない。シュリーマンの欲望はとどまることを知らなかった。彼の頭の中では、既に全世界が相手であった。

発掘の成果は、専門家向けの研究誌よりも大新聞に発表され、新事実は、直ちにタイムズやアウグスブルグ新聞、ギリシャ国王に打電された。そこでは、新聞に好意的な記事を掲載してもらうため、金を使うのも常套手段であり、世論操作を含めた壮大なドラマが発掘とともに進行していた。専門家たちの白眼と一般大衆の支持というのが構図であった。したがって、もはや発掘さえもそのドラマの筋書きを逸脱することは許されなかった。そのなかで、発掘の事実関係の改竄やヤラセが進んでいった。

似たようなことが、最近の日本でも起こった。東北旧石器文化研究所の前副理事長の藤村新一による旧石器捏造事件である。

ドラマは、宮城県岩出山町の座散乱木遺跡で、一九八一年に四万数千年前の石器が、藤村新一の手によって発見されたことに始まる。それまでは三万年以上さかのぼる人工遺跡は存在しないと考えられていただけに、日本にも中期に遡る旧石器時代があったことを高らかに宣言

した大成果であった。

これに勢いを得たのであろうか、藤村新一は、三年後の一九八四年には古川市の馬場壇A遺跡でも十七万年前の石器を発見し、旧石器時代を一気に前期まで遡らせる。それからというものは、とどまることを知らぬように、わずか二十年たらずの間に、十万年単位で「日本人の起源」を更新し続け、ついには秩父市の長尾根、小鹿坂両遺跡そして宮城県築館町の上高森遺跡や北海道十津川町の総進不動坂遺跡で、五十万年、六十万年、七十万年前の石器を発見し、世界の人類史の通説を覆す大発見を成し遂げる。

とにかく神がかっていた。二十件以上にもわたる前期・中期旧石器時代遺跡の発掘で、藤村新一だけが、大成果を上げ続けた。これにお墨付きを与えつづけたのが、奇しくも岩宿で相沢忠洋を助けた芹沢長介である。

マスコミも町おこしを願う地元も、世論は「日本人の起源」の繰上げ更新をあげて歓迎していた。アマチュア学者の研究には冷淡でも、学界の権威の「お墨付き」があれば、多少うさん臭くても大手を振って通用するのが考古学界であった。それをマスコミが後押しした。いやリードしていたのである。

藤村新一は仙台市内の高校を卒業後、独学で考古学の世界に入ったアマチュアである。一九七二年に本格的な活動を開始し、七五年には相沢忠洋に会って激励を受けている。そして、座散乱木遺跡で大成果を上げてからは、次々に「神の手」によって成果を上げ続ける。もう既に異様な世界であった。

もっとも、座散乱木遺跡の場合についても、当初から異論があった。東京都教育庁の主任学芸員であった小田静夫が『人類学雑誌』に批判論文を寄せて、三万年以前にさかのぼる人工遺物の確かな証拠は、いまだ存在しないと真っ向から異議を唱えていた。小田静夫は石器の専門家である。しかもその論文が考古学の学会誌ではなく、人類学史の学会誌に書かれていたことにも注目する必要がある。考古学の学会誌では握りつぶされる恐れが多分にあったからである。

それにしても、考古学分野における相互批判の乏しさはどうしたことであろう。それは新しい学説が、無視され軽視される風土と無関係ではない。学界の権威に逆らう主張は無視され、権威の認めたことには無批判で従う。異論を黙殺し、議論を避けてきた考古学界。だからこそ藤村新一の行為以上に、それを許してきた考古学界の体質が問われなければならないのである。

普通なら、藤村新一だけが大成果を上げ続ける異様さに、気がつかなかったはずがない。しかしそれを声高に主張したのは、共立女子大の非常勤講師である竹岡俊樹だけであった。

幼い頃から石器になじみ、パリ第六大学で旧石器の本

格的な修行をつんできた竹岡にとっては、藤村新一の業績には不可思議なことばかりが目立った。何度も氷河期を経ていれば、歪みがあるはずなのに平面に並んで出てくるのも不思議だったし、石器を手に取ってみれば技法は縄文時代のものが多い。ヨーロッパの知識では、旧石器原人は力が強くても、とても指先の微妙な制御は無理で、縄文時代の石器のようにものは作れるはずがなかった。

竹岡俊樹はその疑問を学術誌に発表するが、学界アウトサイダーの悲しさで、またもや無視される。そのため非常手段として、当事者や学界の権威にもその論文を送りつけるが反応がなかった。そのような行為そのものを嫌う学界は、既に自浄能力を全く失っていた。

そして問題解決がマスコミに委ねられるという悲劇的な結末を迎えた。いわばマスコミが藤村新一の悲劇を誘発し、マスコミがその悲劇を暴いたわけである。考古学界自身で問題を解決し得なかったことは、藤村新一の捏造事件よりもはるかに深刻な事態であった。

竹岡俊樹は、オウム真理教事件の解明などにも著書のある多才人であるが、国際的な旧石器研究者である。その彼の肩書きが、共立女子大の非常勤講師である。そのことだけでも、日本の考古学界の国際的な閉鎖性か判る。

かって戦前には、明治の元勲大山巌の息・大山柏によってヨーロッパの旧石器については詳細に紹介されていた。しかるに、日本では考古学の発掘が盛んになるにつれて内向きになって国際性を失って行く。批判を嫌い異端を排除して、仲間内でのみ権威を作りあげ、その権威にあぐらをかいて、自由な批判を黙殺する。それにマスコミが同調していた。逆説的ではあるが、いわば考古学界全体がアマチュア化してしまっていたのである。

事件が明るみに出た後に、いわば当事者のひとりでもある芹沢長介が、中央公論誌上で「波乱の考古学界を憂えて」いる。それを読むと、一九九七年の時点で既に、中国や韓国の学者が、石器の状態を見て、疑問を呈していたことがわかる。中国や韓国の学者にわかったことが、なぜ日本の学者にわからなかったのか。いや日本でも竹岡俊樹のように疑問の声を挙げていたはずなのに、芹沢長介は、なぜか一言もその発言について触れていない。全く不可解である。

シュリーマンの場合と藤村新一の場合では、時代背景も、発掘に当たっての立場にも大きな相違がある。しかしそれにも関わらず、共通点がたくさんある。両者共に学歴コンプレックスを持ち、両者共に結論さえ正しいと信じれば、世論に受入れやすい状況を捏造しても、罪の意識が薄かった。それは今のジャーナリズムに満ち溢れているヤラセの気風そっくりである。判りやすい状況を作り出すためには、ここから財宝が出土し、そこに石器

が埋まっている必要があった。そしてその通りに遺物が出てくることこそが、サービスであり正義であり、捏造という非合法的な手段であっても、主観的には何も間違ったことではなかったのである。

藤村新一の行為は、いま世論の指弾を受けている。しかし真に咎められるべきは、そのような行為を自浄し得なかった考古学界の方にある。何が彼をそこまで追い込んだか、なぜ自浄作用が働かなかったかが厳しく問われるべきであろう。それと共に、一部の捏造資料混入だけで、遺跡の性質が変わってしまうほど、考古学発掘とは未成熟な技術ではない。いくら問題の多い考古学界でも、宝さがしばかりに熱中していたわけではあるまい。事実、藤村新一の絡んでいない遺跡からも、前期や中期の純正な旧石器が発掘されているのである。

当然なこととして、藤村新一の絡んだ遺跡については、今後徹底的な再検討が行われよう。その結果、前期、中期旧石器の多くが否定されるようなこともあるかも知れない。しかし、シュリーマンや藤村新一の心理に立ち入れば、そんなことは決して有り得ない。両者ともに、遺跡の性質については、信頼していたのである。無から有を生じさせたわけではない。

今日、シュリーマンの虚言癖が明らかになり、発掘結果に疑わしき点が数多く見つかっても、彼の地中海考古学に与えた功績は、いささかも軽減されることはない。それは、シュリーマンが本質的なところでは、発掘を信じていたからである。いわば、虚構の「プリアモスの財宝」を準備し、ロマンある伝記物語で世界の世論を操作したのは、シュリーマンのサービス精神の発露であった。それに彼の名誉欲や学歴コンプレックスが絡んでいただけなのである。

したがって、シュリーマンの最大の功績は、世界の目をホメロスの世界に集めさせ地中海考古学の流れを作ったことにある。シュリーマンは本能的にそのことを良く知る、時代の演出者であった。

その意味では、状況は異なっても、藤村新一も、日本の旧石器時代を華やかにマスコミの世界に登場させた功労者であった。そのことによって、地味な旧石器時代の発掘調査が、維持されてきたことも忘れてはなるまい。さもなければ日本において前期や中期の旧石器遺跡発掘がこのように継続されたはずがない。問題の根底には、日本における学術文化に対する国の認識不測と援助不足があったのである。藤村新一の狙いは、彼の奇異なる行動によって、この困難な事業を継続させることにあったように思えてならないのである。

私には、シュリーマンと藤村新一が良くわかる。……

……。